目　次

巻頭言　わたしの俳句遍歴	秋山　賢司	2
詩「山河残照」	曽我　貢誠	4
評伝　仙酔余滴Ⅴ	吉田　邦郎	10
詩　扉	葉山　美玖	16
詩　草の種　合格祈願	服部　　剛	19
詩　樹の詩人・お茶を一緒に	市川　恵子	22
紀行　ウィーン滞在記	熊野　友嗣	26
詩　詩を書くということ・他（イラストも）	マエキクリコ	30
連翹忌通信　Ⅱ	小山　弘明	36
捨てられた傘たち・他	近藤　　頌	39
詩　わたしの死んだその朝は	高橋　晃国	42
評伝　十和田湖「乙女の像」秘話	川口　浩一	44
ドイツ訳詩集３（Ⅰ・バッハマン）	勝畑　耕一	52
詩 歌 三 評　碁の句――春夏秋冬――		57
松林　尚志　伊藤　礼　郷原　宏　平　圭三		
宇田川寛之　谷岡　一郎　佐藤　映二　下川　敬明		
島岡　明子　蔦垣　幸代　桐野　昌三　原　詩夏至		
トンボの輪（市川・服部・勝畑・曽我）		67
編集後記	桶屋風太郎	72

題　　字　中島敏枝

編集協力　中土昌則・大井結子

わたしの俳句遍歴

秋山　賢司

俳句に関してまったくのしろうとが遍歴などとは、噴飯ものでおこがましい限りだがまあ笑って読んでください。

俳句に初めて出会ったのは中学二年、草野先生の国語の授業だった。詩人草野心平の息子さんらしく、授業内容が変わっていた。教科書はあまり使わず、大半が俳句の講義なのである。一学期が終わろうとする頃、蝉を季題に俳句を作りなさいといわれる。真っ先に手を挙げたのがわたしだった。黒板の前に出て書いたのがこれ。

四時間目教師の声より蝉しぐれ

なかなかいいとほめてくださった。調子に乗ってもう一句作ったのが失敗だった。

蝉の羽根もいだらこれがセミヌード

怒られました。当時学校の近くに日劇ミュージックホールがあり、アンジェラ浅丘や松永てるほらのセミヌード写真が飾られ、ませた中学生のわたしはドキドキしながらながめたものである。級友には受けたものの、こ

んなのは俳句といえませんね。草野先生は名誉挽回のチャンスを与えてくれた。俳句の宿題である。夏の句なら季題は自由。これは寝ないで真剣に考えた。

涼しさやのどかな門（かど）のやさし鈴

鈴は風鈴。じつは同級であり初恋の人でもある門脇鈴さんに風鈴をプレゼントしたばかりだった。草野先生はこのことを薄々気付いていたうえで「形容詞が多く、へたな句だね」と評した。当然だ。しかしこの句の仕掛けに気づいてほしかった。お分かりでしょうか。回文なのである。

以後、私の作る句は回文か語呂合わせばかり。社会人になって碁について書くという仕事についてからは、俳句や漢詩（碁の俳句や棋詩が中心）をまじめに鑑賞するようになったが、どこかに、回文好きの血が残っていた。正岡子規没後百年の平成十五年にはこんな句を作った。

血を吐きつ子規なお啼（な）きし月は落ち

これを朝日新聞の俳句担当記者に見せたところ、「へただねえ」とひとこと。そこで回文と種をあかしたところ、びっくり仰天。数日後、記者から電話があった。「金子兜太先生にご注進したら、傑作で、講演に使わせてほしいといわれる」。名誉な話ですからね、ノータイムでＯＫしました。わたしの俳句遍歴の中で、ささやかな思い出である。

山河残照
―奥羽山脈の麓の村より―

曽我　貢誠

ふるさと

人は
いつでもふるさとを思う
どこにいてもふるさとを思う

人は
ふるさとを忘れたいと思う
ふるさとに帰りたいとも思う

人は誰でも
こころにふるさとを持っている

雪解け

雪解けのころ
ぬかるんだ道が歩きにくかった
ふと足元を見ると
深く積もった雪の割れ目から
ばっけがちょこんと顔を出した

チョロリチョロリと水の音
ピイラピイラと鳥の声
いつもは雪の舞う鉛色の空も
すっかり青い空が広がっていた
もう春は近いぞ

※ばっけ→フキノトウの方言

蛍の夢

お盆を迎えるころ
畦道には蛍が無数に飛んでいた
夢中になって両手ですくった
蚊帳（かや）の天井に虫かごを吊るし床に入った
青白い光がじっと自分を見つめていた
光の向こうに銀河の神秘が広がっていた
その日はなぜかぐっすり眠れた

朝起きると蛍のほとんどは死んでいた
わずかに動くなかに命の無常を見た
少年の心の奥がキュンと痛んだ

そっと草むらに返しに行った
涙だろうか　囁きだろうか
葉っぱから夜露がぽとりと落ちた

収穫のころ

黄金色の風景が広がる
爽やかな風に稲穂が揺れる
大空にゆっくり鳶が弧を描く
村人たちは一斉に動き出す
シャッ、シャッ、シャッ
女たちは手早く鎌で刈っていく
男たちは黙々と稲わらを束ねる

野山が夕日に染まる頃
やっと刈り採りが終わった
村人たちの頬に笑みがこぼれる
遠くの家々に灯がともる

雪原にて

冬
来る日も来る日も
鉛色の空が広がり
雪が舞っている

今、雲が切れて
日の光が差してきた
透き通るような青空
銀色の雪原がどこまでも続く

北国に生まれ
無上の喜びを感じる
このひとときこのかがやき

お帰り

ふるさとに帰ると
いつしか私の心は若返り
「よく来たね　元気だった
また一緒に遊ぼうよ」
そこらかしこで
優しい過去と戯れる

我が家に戻ると
いつしか私の心は元通り
未来がそっと囁きかける
「お帰りなさい
ここがあなたのふるさとよ
これからもずっと元気でいてね」

仙酔余滴 V

仙酔出生の謎
―異母兄弟だった阿久利と仙酔―

吉田邦郎

平成二十五年六月にわが祖父の評伝『忘れられた宗教哲学者　斎木仙酔』を出版してから、もう四年も経過してしまった。上梓後も『トンボ』に四編、仙酔と関わりのある、それまで埋もれていたことや、新たに発見したことを書いてきたが、本編はその中でも特筆すべきものである。

評伝を執筆するにさいして、筆者がまず頼りにしたのは『福山藩の文人誌』と斎木士門氏の『斎木氏の研究』ならびに筆者の母ノブが亡くなったときに文京区から取り寄せてあった除籍謄本であった。この除籍謄本で斎木延次郎（仙酔）の本籍は「東京市小石川区豊川町四拾八番地」となっており、前戸主との続柄の欄には「父・文禮、母・イサの弐男」と記載されていた。一方、仙酔の兄・阿久利の四男である斎木士門氏が著した『斎木氏の研究』では阿久利、延次郎兄弟の母親は沢田氏出身の「さき」となっている。評伝を書き始めた当初より筆者はこの「イサ」と「さき」の相違に気付いており、評伝中ではこのくい違いの「真偽は

不明である」が、恐らく士門氏が仮名では同音の彼の曾祖母である日根氏出自の岬（サキ）と、沢田氏出自の祖母さきを、混同した誤りであろうとして片付けてしまった。

仙酔の母親については、明治四十年、渡米する前に『新人』へ執筆した自叙伝中でも、夭折した自分の母親の名はイサと明記している。謄本とも一致しているこの傍証を確認し、筆者はこの問題に一応のケリを付けたつもりにしていた。しかし一方では、若い時分から「斎木氏の研究」をライフワークとして取り組み、全国多数の斎木家の系譜を丹念に調べあげていた士門氏が、果たして本当に自分自身の祖母の名を取り違えたのだろうか、という一抹の疑念を捨てきれないでいた。

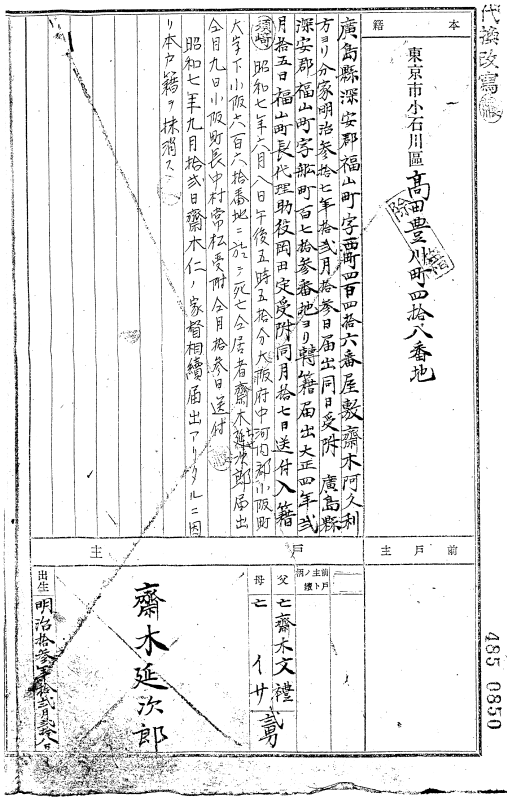
この疑念を筆者は阿久利の直系の孫で斎木本家の現在の当主である斎木克（カツ）氏にぶつけてみた。勿論、前述の除籍謄本や『新人』記載の自叙伝その他の証拠を彼宛への書簡に添付したうえでのことである。

克さんの返事は「斎木家には私の曾祖母である沢田氏出自のさきの正装姿の掛軸も残っており、彼女が実在の人物であることは確かだ」とのことであった。また士門氏の『斎木氏の研究』にも、沢田さきは広島県比和郡三和町の浄土宗西福寺・住職・沢田某の子息沢田寛三郎の次女さきで、その姉の佐和子は福山市鞆町にある沼名前神社・神職・森下佐野右衛門に嫁ぎ、森下仁丹を創立した森下博を生んでいることも記載されている。ちなみに時代が下り明治末期、博の娘・次子（ツギ）と婿・長蔵夫妻には子供がなく博の従兄弟である仙酔の次女チエは幼少時、長蔵・次子夫妻の養女に迎えられていた。（のちに実子が生まれチエは実家に帰される）

さて以上、二人の母親説、即ち「弟仙酔の母親はイサ、一方、兄阿久利の母親はさきである」ことが、疑いのない事実と判明した現在、阿久利、仙酔は異母兄弟であったと断ぜざるを得ない。しかし、なお三つの疑問が残ってしまった。

その第一は、それならば士門氏の著書には載っていない出自がまったく不明な「仙酔の母親イサとは何者なのか？」という点。第二は、この点に触れていない士門氏は「この事実を知っていたのか？あるいは意図的に隠蔽していたのか？」という点である。

そして第三は「文禮の嫡子・阿久利の母さきが正妻であるとしたらイサは側室または妾であり、非嫡出子である仙酔が「戸籍上は弐男となっているのは何故か？」という疑問である。関係者すべてが遠い昔に故人となっている今となっては真相を知る由もないが、今回はその辺の事情を探ってみる。


代換改寫

本籍

東京市小石川區高田豐川町四拾八番地

廣島縣深安郡福山町字西町四百四拾六番屋敷齋木阿久利方ヨリ分家明治參拾七年拾弐月拾參日届出同日受附廣島縣深安郡福山町字新町百七拾參番地ヨリ轉籍届出大正四年弐月拾五日福山町長代理助役岡田定受附同月拾七日送付入籍

昭和七年六月八日午後五時五拾分大阪府中河内郡小阪町大字下小阪六百八拾番地ニ於テ死亡今居者齋木延次郎届出

今日九日小阪町長中村常松受附今月拾參日送付

昭和七年九月拾弐日齋木仁ノ家督相續届出アリタルニ因リ本戸籍ヲ抹消ス

前主戸主

主戸

消ノ主戸

綴ノ主戸

父 亡齋木文禮

母 亡 イサ 壽

齋木延次郎

出生 明治拾參年拾弐月拾弐日

485 0850

斎木延次郎（仙酔）の除籍謄本

斎木　仙酔
（1880－1932）

これらの疑問に対するひとつの鍵は、二人の父親である文禮益光（一八四三〜九四）の性行である。前出『斎木家の研究』によれば、彼は五二年の生涯に三度の妻帯をし、阿久利、延次郎を含め七人もの子をもうけている。

恐らく士門氏は斎木家の菩提寺・安楽寺の墓石か過去帳からでも調べたものであろう。最初の妻は戒名のみの記載しかなく「女」とのみ記されている。この女性の出自は日根氏となっており、文禮益光の母親・岬と同一家系の日根氏の女性を娶ったものと士門氏は注記している。いずれにしろ、この先妻との間に文禮益光は夭折した延太郎、寅雄の二男を儲けている。

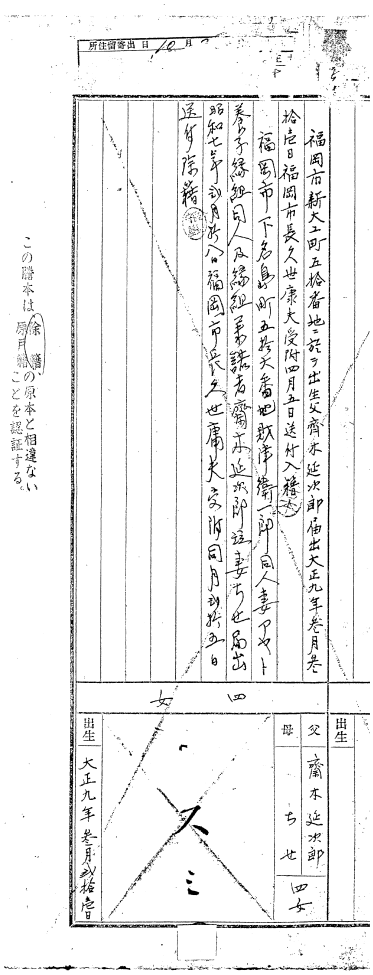
次に娶ったのが沢田氏出自の正妻さきで、士門氏は彼女が阿久利、延次郎・仙酔を生んだとしている。このさきは明治一五年五月に逝去しており、明治一三年生まれの仙酔が「母イサは二歳のときに死んだ」とする年と奇妙に一致している。果たしてさき、イサの二人は本当に同じ年に亡くなったのであろうか。

三人目の後妻、尾道出身の財間たかとは益太郎、等（シナ）子、俊雄の二男一女をもうけている。益太郎は大正元年二四歳で若死したが、唐沢家に嫁いだ唐沢等子さんと斎木俊雄氏は第二次大戦後も存命しており、特に筆者の母ノブが「俊叔父さん」と呼んでいた俊雄氏は娘の俊子さんを伴い何度か吉田家を訪れ、その記憶が十代だった筆者にも残っている。

このように並び立てると医師であった文禮益光は、性任侠（『福山藩の文人誌』記載の性格描写）、であると同時にかなりの艶福家であったことが推測される。この推測と当時の風俗や倫理を勘案すると彼に妾や情人がいたとしてもちっとも不思議ではない。仙酔の母・イサはそのような女性であったのではないだろうか――――。

さらに大胆な憶測をしてみよう。

寫眞で見るとおり、仙酔の容貌はかなり日本人離れしている。実際に筆者の母親ノブの思い出話にも、滞米中の仙酔はよくユダヤ人に間違えられたという逸話が遺されている。また山岡千代さん（阿久利の次女）をはじめ何人かの甥・姪たちも、なかば冗談に「仙酔さんには外人の血が混じっているのではないか」と語った話が伝えられている。もし阿久利の子供である甥姪たちが自分たちの父親と弟の仙酔の母親が同じでないことを知っていなければ出てこない冗談である。また仙酔の五人の子供たちの中で、もっとも西欧人的容貌をしていたのは末娘の四女・スミ（一九二〇〜一九三五）である。彼女も生前には、よく西欧人と間違えられた、という話がノブをはじめ多数の親類のことばに残されている。



所住留置出日　10月

福岡市新大工町五拾番地ニ於テ出生父齋木延次郎届出大正九年卷月卷
拾壱日福岡市長久世康大受附四月五日送付入籍
福岡市下名島町五拾六番地獄害郎同人妻アヤト
養子縁組届人及縁組者連署ノ上延次郎這妻ちせ届出
昭和七年四月廿八日福岡市長久世康大受附同月廿九日
送付済

女　四

出生　父　齋木延次郎
母　ちせ
四女
スミ
出生　大正九年卷月卷拾壱日

この謄本は原戸籍の原本と相違ないことを認証する。

斎木スミの除籍謄本

上　スミ（1920－1935）
下　スミ（前列右）と父仙酔の兄
　　阿久利の長女、川端田鶴たちと。

ノブの遺品にあった寫眞、十三歳の彼女の顔立ちは、年上の従姉妹と比較して、際立って日本人離れしていることがお判り頂けよう。当時、彼女は近隣でも評判の美少女で、また文才もあり、少女雑誌の懸賞小説に入賞した話も伝えられている。幼いときに財津家に養女に出され、僅か一五歳で夭折した彼女は私にイサを連想させる。

医師としての文禮益光は維新後、中島玄覚や坪井中博士らと共に英人某氏、長崎の蘭医シーボルト、ポンペ等にも師事したことが伝えられている。いずれにしろ、当時では極めて少数派である西欧人との深い交際を持っていた人物であったことは確かである。

以上のように、もしかしたら本当に仙酔の母親イサは、文禮と交際のあった西欧人と日本人の娘の間に生まれたのか、四分の一かであり、仙酔には西欧人の血が流れていたのかもしれない。そう考えると、誇り高い斎木家の系図からイサの名前が抹消されていることにも説明がつく。

このことが事実だとしたら、つぎに問題となるのは、仙酔の次の世代の人達がこのことを知っていただろうかということである。あるとしたら唯一の例外である士門氏やその兄弟・姉妹を除き、母ノブを含め仙酔の子供たちや他の近親者たちは誰も知らなかったと私は思っている。

これまで私は親の世代の誰からも、阿久利と仙酔が異母兄弟であることも、筆者にとっては曾祖母に当たるイサの名前も耳にしたことがなかったからである。ちなみに文禮の正妻さきと、その姉・佐和の姉妹については、叔母のチエ（高浦チエ）が幼時に仁丹の森下家（佐和の嫁ぎ先）の養女になっていたことと関連して筆者は何度も母親から聞かされていた。

士門氏はどう考えていたのか。斎木本家の現当主である克さんは「知らなかったと思う」と述べている。しかし右記からして、私は事実を知っていたのではないかと考えている。あれほどの執念を持って永年にわたり綿密かつ詳細に斎木姓を名乗る人達の血脈を調べあげ、『斎木氏の研究』を完成させた彼が、知らなかった筈はないと思っている。いずれにしろ、客観的な情報は残っているが確証はなく、今はすべてが闇の中ではあるが――――。

（次号へ）

扉

葉山　美玖

マンションの林立する森で
とある扉を見つけた
思い切って開けてみると
煌々とした黒い部屋があった
私は迷っていた
その人は私の手を取って
よく眠ること
少し食べること
ときに出掛けることを教えてくれた

小さな器に
ミネラルウォーターを注がれて
喉をうるおし

その人に褒められて
ちゃんと間違いを注意されて
よいものを体に取り入れて
私の閉じた心が
突然
開き始めた

相手をよく見て
耳をすまし
表情がゆたかになり
口を尖らせたり
目尻で笑ったりできるようになった
私は
人と真摯に向き合うようになった
その人の幸せを
思うようになった

人を思い通りにしようとする事と

気持ちに寄り添う事は
全く別だった
私の中にも
愛はあった
すきとおった水の飛沫が
グラスの縁から
溢れて
溢れ出して

苦しいほどに
ほとばしる
いま
目の前にいる
あかるく笑って
落ち着いた声で
対等に話しかけてくれる
その人自身が
扉だった

草の種

服部　剛

アスファルトの割れ目から
草は小さな両手をひろげ
生えている
（露水晶（つゆすいしょう）に陽を写し）

わたしの中にも
自らを開くいのちの種が
眠っているかもしれない

合格祈願

湯島天神の境内に入り
石段で仰いだ空の雲間から
顔を出す
しろい輪郭のお天道様が
遥かな距離を越えて
この頬を温める

あぁ、皿回しの利口なお猿さんが
師匠に手を引かれ
ひょこひょこ去ってゆく

あぁ、本堂の太鼓と笛は鳴り響き
紋付き袴と白無垢の新郎新婦は
中へ、吸い込まれゆく

梅の花ひとひら
石畳に、舞い

どうしてこんなに重いのか
人間達のぶら下がる
無数の絵馬に吹く風の
からころ…と鳴る、瞬時の歌よ

遠い空の北国では
かわいい姪が
十日後に
受験という名のリングに上がる

石畳の階段を下りながら、僕は
合格祈願のお守りを
胸の内ポケットに入れた

樹の詩人

市川　恵子

緑がわさわさと
新しい命を奏ではじめたときに
そのひとは還っていった
ひとは一本の木であり
人生は森の一日のようだと語っていた
森にはいっさいの無駄がないように
ひとの人生にもまた
いっさいの無駄はないと
近くのものを見るためには
遠くを眺めてみることを
遠くにあると思っているものは
いまここ、に在って
いつか、は永遠にやってこないことを教わり
進むことを覚えたひともいた

ひとがこの世からなくなったとき
初めて語ることができる関係があることを
遺された者の生きていく時間は
逝った者が遺した時間だということも
星空や枯木から零れくる
沈黙に
耳を傾けなければならないことも示してくれた
そうして
ひとが生きていく根拠は
仕事をすること、つまり
ものを考えつづけること、だと思う
と小さく呟いたあと
仕事をやり終えた皐月に
とても静かに
そのひとは樹に還っていきました
愛する木の隣へ
うれしそうに
やっと来られたよ、と微笑んで

お茶を一緒に

これから
お茶を
のみませんか

ひとつのテーブルを挟んで
向き合いませんか
まだ
答えのでない
この問いに

最後の一口が
のみおわるころ
微笑んでいられるよう
カップに浮かぶ
この問いを

少しずつ
少しずつ
口に含んでみませんか

すべてをのみ干し
その場に置き去る
お酒じゃなくて

今夜は一緒に
お茶を
のんでみませんか

ウィーン滞在記

熊野友嗣

「ひっくり返したテーブル」の愛称をもつ白壁の城に、マリア・テレジアはじめ歴代ハプスブルク家当主がハンガリー王の戴冠式を行った大聖堂。スロヴァキア共和国の首都ブラチスラヴァは、時間がゆったりと過ぎていく街だ。旧市街は三十分もあればすべての通りを歩けてしまう。日本では、古い区割りを残す地方の街をよく「小京都」と呼ぶが、ブラチスラヴァはさながら「小ウィーン」といったところだろうか。

今夏およそ一ヶ月半の欧州紀行を計画した私は、デンマーク、スウェーデン、イギリス、ハンガリーと回り、ブダペストからバスでブラチスラヴァへとやって来た。ここから隣国オーストリアの首都ウィーンまでは、鉄道なら在来線でもわずか一時間。距離でいうなら、東京駅から成田空港までより少し近いくらいだ。この近接する二都の間に、かつて「鉄のカーテン」が引かれていたのかと思うと、冷戦をほとんど知らない私でも、時代の変遷というものを考えずにはいられない。

ウィーンはうって変わって大都会だ。しかし、それでも人口は二百万に満たない。東京のようにどこまでも続く家々を抜けてなどということはなく、窓の外にぼんやり田園風景を眺めていると、いつの間にか中央駅に着いていたという感じ

だ。

まずは地下鉄に乗り換え、宿へ向かう。宿といっても、普通のアパートメントの一室だ。費用を抑えるため、今回の旅ではできるだけ民泊やドミトリーを活用することにしていた。民泊サイトを介して契約した家主の女子大生は、自身が長期不在にしている間だけ部屋を貸したいということだった。

民泊といえば、東京五輪を前に日本でも話題になってはいるが、日本人が国内で利用してみたという話はほとんど聞かない。ホームパーティーすら一般的ではない日本では、見ず知らずの他人を自宅に泊めるという発想がそもそもないのだろう。

逆にヨーロッパでは、民泊サイトに登録している部屋の多さに驚かされる。全部で四回民泊を利用したが、ウィーン以外はいずれも、家主が在宅していて部屋を間借りする形式だった。なかには壁一枚を隔てて若い女性と一つ屋根の下という状況で、こちらの方が相当に気を遣ってしまうということもあった。

私がウィーンを訪れたのは、今回で三度目だ。大きな名所はすでにひと通り訪ねている。なので、十日の滞在のうち、観光に出かけるのは天気の良い二、三日くらいという腹積もりであった。それ以外の日は洗濯に買い出しにと家事に精を出す一方で、当てどなく旧市街を歩いたりした。ただ、せっかく楽都へ来たのだから、やはり音楽には触れておきたい。ちょうど、国立歌劇場の周辺に宮廷音楽家の格好をした売り子が幾人もチケットの勧誘をしていたので、そのうちの一人に声をかけてみた。

日本人はよほど上客なのか、向こうも私を見るなり片言の日本語フレーズで愛想よく話しかけてくる。私がドイツ語で返すと今度は驚いた様子で、さらにあれこれと勧めてくるようになった。終いには、「君は学生に見えるから学生料金でいい」と言い出す始末。これでは購入しないわけにはいかなくなってしまった。他の数人の売り子とも会話をしたのだが、面白いことに彼らはみなイタリアやセルビア、コソヴォなど、オーストリア以外の国の出身だった。

ちなみに、近年はよほどドイツ語の人気がないのか、公演当日の歌劇場でエレベーター係の青年に何気なく話しかけたときも、やたらと感激された。上階に着くまでの短い間にいろいろと訊かれたのもいい思い出だ。

ウィーンの旧市街はどこを切り取っても絵になる。それは裏通りも同じことで、大きな通りはほぼ頭に入っている私は、時間があればまだ歩いていない路地を求めてふらふらと彷徨した。すると、しばしば何の前触れもなく狐雨がやってくる。この時期のヨーロッパの雨は、二、三十分程度ざっと降って止んでしまう。雨宿りを兼

ねてウィーン名物のカフェに入るのには、ちょうど良いきっかけとなる。目に付いた店から適当に選ぶので、当たりもあればはずれもある。そのなかに、私が知っている範囲で最も好きな店があったので、ここでちょっとその珈琲屋を紹介したい。

そこはたいていのガイドブックに載っている有名なカフェの支店なのだが、観光のメインルートからは離れているので人通りも少なく、とても静かだ。本店は常に観光客でいっぱいで、回転も速い。だがこちらは本店より広いにもかかわらず客はまばらで、みな周りの何物も気にすることなく自分の時間を過ごしている。私もコーヒーとシュトゥルーデルだけで居座り、備え付けの新聞を読んだり、書き物に勤しんだりした。店員も誰も、長居を咎める者はいない。店のつくりや調度品などは比較的新しく、レトロ感という点では本店に及ばないだろう。だが、この時間が、空間が、そして雰囲気こそが、ウィーンのカフェ文化そのものという気がした。

行楽日和にはウィーンの外へも足を延ばしたが、一番のお目当ては私の趣味の城跡だ。こんなところまで来て藪をかき分け廃墟を訪ねる海外からの訪問客など、私の他にそうはいないのではないだろうか。

城跡巡りという趣味の利点のひとつは、観光地とは認識されていない地域を意図せず訪ね回れるところにあると思っている。今回のウィーン滞在中には、二つの町で城跡を巡った。そのうちのひとつメートリンクは、ウィーンから鉄道で二十分ほどの、郊外のベッドタウンだ。旅行者向けのものはとりたてて何もないが、それでも町の中心には石畳の広場と緩やかな傾斜地に建つ中世風の役場があり、十分に写真映えのする景観を創り出している。こういうちょっとした美しい風景や面白い出会いに遭遇するにつけ、趣味のついでに良い「旅」ができたという気分に浸ることができるのだ。

もうひとつの町は、メートリンクからさらに五分ほど電車に揺られて着くバーデンだ。こちらは古くから保養地として栄えたところで、ベートーヴェンも何度か療養に訪れ、そのとき滞在した家は博物館となっている。ここでの発見は、地元のホイリゲを知ることができたことだ。ホイリゲとは、もともとはワイン農家がその年の新酒を供する直営の簡易居酒屋を指すが、今ではウィーン周辺の野外のワイン酒場を広くそう呼んでいる。

バーデンの青物市場で昼食を摂っていたとき、隣に座っていた常連が赤ワインを嗜んでいた。私が観光地化されていない昔ながらのホイリゲを探しているという話を振ったところ、なんとこのバーデンにこそ伝統的な店がいくつも残っているという。夕方を待ってそのうちの一軒を訪ねてみると、果せるかな、旅行者らしき客は一人

もいない。決して広くはない中庭のテーブルで、子供連れの家族や訛りのきついご老人などに囲まれながら、自家製ワインをゆるゆると楽しむことができた。

最後にもうひとつ、普通の観光ではできないであろう発見の話をしたい。今回の独墺滞在に際して、私はさる人からドイツ語の古書を一冊探すように頼まれていた。ウィーンでもいくつか古書店を回ったが、マンガや文庫本が棚を占める日本とは違い、欧州の古本屋はまるでアンティークの博物館を訪ねているかのような趣がある。目当ての本は結局ウィーンでは見つからなかったが、そのぶん古書店巡りを楽しむことができた。

ただ、夏季ということで休業も多く、旧市街の一歩外側に訪ねたその店も閉まっていた。わざわざ来たのにと肩を落としていると、すぐ近くにビールの醸造所兼レストランがあることに気付いた。入ってみると、店内には銅色（あかがねいろ）の発酵槽があり、奥には静かな中庭の席もある。観光客はいない。若いウェイターが、今でもときどきこの辺りは道に迷うと言っていたのを覚えている。偶然の出会いに乾杯しながら、私はビールの杯（はい）を重ねた。

まだまだ体験話は尽きないのだが、残念ながら紙幅が足りそうもない。別の機会のあることを期待しつつ、今回はここで筆をおくことにしたい。

ちちぶ文学散歩

野口　正士

秩父の神社、仏閣に点在する歌碑・句碑のみならず、山野に埋もれた碑を探して三十五年。その三百二十二基の由来をカメラ片手にまとめた一冊。長瀞に生まれた元鉄道マン野口正士による、ちちぶの風土と文化が薫る労作。

牧水・雨情・啄木・賢治・金田一春彦の歌碑、万葉集から芭蕉・虚子、兜太の句碑、荒川・大滝・吉田・両神、旧町村名が載った詳細な地図が旅情をさそう。

B5判・二四〇頁
二五〇〇円（税別）
送料無料。弊社に直接申し込み下さい。

To Write Poetry

Kuriko Maeki

To write poetry
At times it is like
Slipping into a cafe in a town unknown
Laying low where time runs slow,
I taste filtered words, dripping
A break from routines, so brief

To write poetry
At times it is like
Getting drenched on a mountain path unpaved
Washed by raindrops heaven poured,
I soak myself in words, showering
A date with nature, so fickle

To write poetry
At times it is like
Getting lost in sudoku pages faceless
Staring at rows with spaces
I search for meant-to-be words, missing
A play of reflex, so blank

詩を書くということ

マエキ　クリコ

詩を書くということ
時にそれは
知らない街で見かけたカフェに
するり入り込むようなもの
時の流れゆるむ空間に収まり
ドリップされた言葉を味わう
ささやかな非日常のひととき

詩を書くということ
時にそれは
舗装のない山道で土砂降りに
ざあざあ降られるようなもの
天溢る雨水に洗われ
降り注ぐ言葉に浸る
気紛れな自然現象との逢引き

詩を書くということ
時にそれは
顔のない数独の頁を無心に
さらさら解くようなもの
空白ばかりの行を見据え
唯一解なる言葉を探る
無表情な反射神経の戯れ

To write poetry
At times it is like
Getting stabbed in the back clueless
Half conscious as pain increases
I'm deep dyed in words, gushing
A lexical treachery, so ablaze

To write poetry
At times it is to
Not write poetry at all
Just grinding the beans
Just climbing the mountains
Just counting the numbers
Just sharpening the knives
And just listening to
The heartbeat of a poem
No one has ever written yet

詩を書くということ
時にそれは
ひと気ない暗闇で背中を
ぐさり刺されるようなもの
遠のく意識と痛みの中で
ほとばしる言葉に染まる
鮮やかな語彙の裏切り

詩を書くということ
時にそれは
詩を書かないということ
ただ豆を挽くだけ
ただ山を登るだけ
ただ数を数えるだけ
ただナイフを研ぐだけ
そうやって
まだ誰にも書かれていない詩の
密やかな鼓動に耳を傾けるだけ

Children's Noses

i like
looking at children's noses
so shiny, so round
like rare beads
each one of them so precious

while
grown-ups' noses are
mere human face parts
children's noses are like
creatures from another world
bud-bud-budding on the earth

so
until they are well-settled down,
we must safeguarded those little noses
do not defile them
do not distort them
do not disparage them
no matter how small they are
all that breathe is just

perhaps
such prayers of grown-ups are
linked to the other world
through holes in the beads

子どもの鼻

私は
子どもの鼻を見るのが好きだ
つやつやとまあるく光る鼻は
めずらしいビーズみたいで
どれもこれもとてもかわいらしい

だって
大人の鼻は
単なる人間の顔のパーツだけど
子どもの鼻は
どこか別の世界の生き物みたいに
ひょっこり地球に生えている

だから
ちゃんとこの地球に馴染むまで
どうか子どもの鼻たちを守って
汚さないで
歪めないで
貶めないで
どんなに小さくても
息するものは正義

そんな
大人たちの祈りは
あの世界に繋がっているのだろう
かのビーズの穴を通して

連翹忌通信（二）
「光太郎遺珠」

小山弘明

前号でご紹介したとおり、毎年四月二日の高村光太郎忌日である「連翹忌」で、全国の光太郎智恵子に関わる皆様のネットワーク作りをさせていただいております。

元々、晩年の光太郎に親炙した当会顧問の北川太一先生がなさっていたそれを受け継ぐ形で、その仕事に当たっておりますが、当方の本来のライフワークは、別のところにあります。すなわち、「光太郎の生の軌跡を明らかにすること」です。

光太郎生前の昭和二十六年から二十八年にかけ、中央公論社から『高村光太郎選集』が刊行されました。中心となったのは、光太郎を敬愛してやまなかった草野心平（当会の祖でもあります）でした。心平はそれ以外にも、同じ時期に光太郎の全詩業の集成を企図し、鎌倉書房や創元社から刊行された『高村光太郎詩集』の編集にも当たりました。また、心平は詩文の集成のみならず、光太郎年譜の作成にも着手、畳何枚分にもなる手書きの年譜が作られました。そうした仕事は、北川太一先生をまきこみ、光太郎が歿した翌年の昭和三十二年から翌年にかけて、筑摩書房から刊行された『高村光太郎全集』（以下『全集』）全十八巻へと受け継がれていきます。

その後も見つかり続けた光太郎文筆作品などを補遺巻に収め、平成六年から十年にかけ、「断簡零墨に至る高村光太郎の全業績を収めた決定版全集」というコピーで、『全集』の増補改訂版全二十一巻別巻一が、同じ筑摩書房から刊行されました。新たに判明した様々な事項を反映し、各巻解題は一新され、別巻にはその時点で最も詳細な年譜も掲載されました。

しかし、その後も『全集』未収録の光太郎文筆作品が見つかり続けています。世の中にインターネットが普及し、様々な情報を手に入れることが可能となったことが大きな要因でした。

光太郎没後五十年の節目、平成十八年には、北川先生と当方の共編でそれらを一冊にまとめ、さらに新発見の文筆作品を所収し、『光太郎遺珠２００６・４』がハードカバーの厚冊で高村光太郎記念会から限定二百部で刊行されました。

その後は、やはり見つかり続ける光太郎文筆作品を一年ごとにまとめ、当方が編集にあたり、「光太郎遺珠」

の題名で、平成十九年・二十年は大島裕子氏編の「没後年譜」と合わせ、高村光太郎談話会から小冊子の形で刊行。平成二十一年からは野末明氏主宰の高村光太郎研究会刊行の雑誌『高村光太郎研究』の中の連載として世に出しており、今後もこの形を踏襲する予定でいます。さらに、そちらでは見つかったものから順次紹介しているため、執筆時期や内容等に一貫性がないので、当会で年二回刊行している冊子『光太郎資料』において、内容ごとに組み直した「光太郎遺珠から」を連載中です。

さて、どういったものが見つかっているかというと、比較的長命だった上に、筆まめであった光太郎ゆえ、書簡が数多く見つかり続けています。『全集』完結の段階で、既に三、一〇一通が収録されていましたが、その後、新たに五百通近くが見つかりました。

その中には「あるべくしてあった」書簡が相当数。光太郎と深い交流がありながら、その人物宛の書簡が『全集』に漏れていた、与謝野晶子、高田博厚、佐藤春夫、平櫛田中、武者小路実篤、チベット仏教学者の多田等観などに宛てたものが見つかっています。

逆に、同じく光太郎と深い交流がありながら、まだその人物宛の書簡が見つかっていないという人物は、石川啄木、有島兄弟、志賀直哉、石井柏亭、梅原龍三郎、岸田劉生、黒田清輝、吉井勇、宮沢賢治など。今後、それらの人物に宛てた書簡がひょっこり出て来ることに期待したいものです。

また、「こんな人物とも交流があったのか」といった書簡もかなり見つかり、光太郎人脈の幅の広さが再認識されました。稲垣足穂、佐々木喜善（柳田国男に『遠野物語』の元ネタを提供した人物）、版画家の川西英、海外ではアンリ・マチス、そして現在も詩壇の重鎮として活躍されている谷川俊太郎氏など。今後も、さらに意外な人物に宛てた書簡が見つかる可能性があります。

そして、書簡に書かれた内容の部分でも、年譜の上でそれまで不明だった細かな日付が特定できるようなものがあったりもしています。編集者の前田晃に宛てた絵葉書から、大正元年に、智恵子と過ごした千葉犬吠埼から帰京したのが九月四日であったことがわかりましたし、花巻税務署に送った葉書からは、昭和二十七年に「十和田湖畔の裸婦群像（通称・乙女の像）」制作のため帰京した三年後、同三十年の六月一日になってようやく住民票を東京に戻したことが判明しました。

その他、日付はあまり関係ありませんが、明治四十三年から翌年にかけ、神田淡路町に光太郎が開いた画廊、琅玕洞の支店をパリに出す計画が語られていたり、『全集』未収録の短歌や俳句、イラストなどが添えられた書簡が出て来たりもしています。

また、光太郎に彫刻を注文した滋賀県在住だった一般人に宛てた書簡十数通がまとめて見つかり、一つの彫刻が愛好者の手に渡るまでの経緯が詳細に記されていたり、親族や姻族宛の書簡もまとめて出て来て、「他人」ではない人々に見せる光太郎の一面も垣間見えたりし、非常に興味深いものがあります。

書簡以外にも、主に散文の類で新聞雑誌や書籍などに発表され、活字になった作品でありながら、やはり『全集』には漏れていたものが、少なからず見つかり続けています。それらの中にも、年譜を補足するいわば新事実が記されていたり、といったものがあり貴重な発見でした。次号のこの項でそれらをご紹介したく存じます。

高村光太郎連翹忌
運営委員会代表

第62回連翹忌の御案内

高村光太郎を偲ぶ連翹忌の集いを、下記のとおり開催いたします。

毎年、高村家の皆様、生前の光太郎を知る方々、美術館、文学館、出版、芸能、教育関係の方々など、多数のご参加を頂いております。

参加資格はただひとつ、「健全な精神で高村光太郎を敬愛すること」のみです。

日　時　平成30年４月２日㈪
午後５時30分～午後８時

会　場　日比谷松本楼
〒100－0012　千代田区日比谷公園１－２
tel　03－3503－1451㈹

会　費　10,000円

会費を下記ゆうちょ口座に
３月24日㈯までにご送金下さい。
会費ご送金を以て出席確認とさせて頂きます。
00100－８－782139
口座名義　小山弘明（コヤマヒロアキ）
通信欄にはフルネームをお書き下さい。

問い合わせ
高村光太郎連翹忌運営委員会　代表　小山弘明
〒287－0041　千葉県香取市玉造３－５－13
tel／fax　0478－54－0671
携帯　090－6175－6254
e-mail：koyama@aurora.ocn.ne.jp

捨てられた傘たち

近藤　頌

土砂降りの
風の強い暖かな夜の冬
路にうち捨てられた傘がぽつりぽつり
線路脇にも危なげに佇む
役立たずとなっても
なお傘であろうとする骨組み
せめて持ち帰られて
丁寧に捨てられたかったであろう　傘たち
うとましく拾われていくであろう　役立たずども
安らかであれ
なんて、都合が良すぎるか

明　暗

あきらめたら
あかるくなった気がした
でもそれは
周りが暗くなっただけだった
それでも
あかるいと感じることが
大切な時もある
だけれども
ぐっすりと眠って
疲労をとるなら
やっぱり
暗闇の中で眠る方がいい